

大木隆生の トキメキと安ら

大木隆生が自身を語る時、必ず生い立ちに遡る。海外を転々とした小中学生時代を「不幸な幼少期」と言い、その経験から“安らぎの地”を切望するようになったという。東京慈恵会医科大学（以下、慈恵医大）に入学した18歳の大木は、同大を本拠地と定め、「自分は慈恵医大から離れない」と心に決めるが、奇しくも血管外科を専攻した大木は手技をさわるため、再び海外へ飛ぶしかなかった。アメリカで血管外科医として研鑽をつけ高い地位と収入を得るようになるも、大木の心は満たされない。そして43歳のとき、慈恵医大に血管外科学

ぎの地。

教授兼外科全体のチェアマンとして呼び戻された大木は固く誓う。「ここに、トキメキと安らぎの地をつくろう」。大木の孤軍奮闘が始まった。大木隆生が求める安らぎの地とはどんなものか。そこからは、何が生まれているのか。

取材：中村敬彦 撮影：木内博

Takao Ohki

東京慈恵会医科大学外科学講座統括責任者・血管外科教授

傾聴真話
trusty

村

笑いに満ちた早朝カンファレンス

朝7時、「ドツ」と笑い声があふれる。外科学講座の大教室で行われる早朝カンファレンスのいつもの光景だ。外科学講座全体を任されている大木はカンファレンスで、自分の専門分野だけでなく、慈恵医大すべての外科学の手術計画について問題点を指摘し、あるいは激励する。中でも印象的なのが、「患者の視点があるか」を常に確認している点。経済現象なども例に挙げて展開される大木の話が、スタッフの気持ちを引き込む。



「たかがカンファレンス、されどカンファレンス。学生や研修医から『外科っていいな』と思ってもらえる雰囲気づくりが大切です。全体の雰囲気がいれば若い人も外科に魅力を感じる一方、集まりが悪くボソボソ話していたら『外科は面白くないさそう』と敬遠されてしまう。カンファレンスをより多くの参

加者が自由に発言でき、活気ある意見をやり取りする場にしたいです。でも、遅刻は厳禁、きちんとした身なりや、正しい日本語の使い方など、規律や礼節も大事にしています」

大木が統括責任者（チェアマン）になる以前、メインのカンファレンスは週に一度、月曜夕方に実施されていた。大半のスタッフが病棟業務や外来に追われ、参加者は10名前後だったという。

「スタッフが参加しやすいう早朝開催にしてから参加者は60〜70名ですから、当時とくらべても外科のインプレッションはずいぶん変わったと思います」

第金曜日の夜、大木は必ず新橋に

「帰国するに際し僕は、家族以外は敵」という殺伐とした米国を反面教師として、外科学講座に「トキメキと安らぎのある村社会」をつくらうと決めました。その実践例が、第一金曜日の月例チェアマン夕食会や、年2回のゴルフコンペ「大木杯」であり、年に3度のOBと現役との懇親会、昇給人事のたびに開催する祝賀会、年一度の医局旅行です。人が集う機会がないと、秩序もウェットな村社会も形成されません」

チェアマン夕食会は、学生や医局員と大木とが気軽に集う会として始まり、50カ月一度も休まず開催。現在は、外科学講座の結束を示すシンボリックな集まりになっている。これまで累計すると延べ1700名が参加しているそうだ。

つい先日、開催は50回目を迎え、幸運にも我々取材陣は記念すべき会への同席を許された。さすがに50回目は普段と様相が違い、場所もいつもの新橋から銀座に移し、参加者150名とひととき賑やかな



大パーティーだった。大木が前に出てスピーチをする。率直な言葉で外科学講座の発展を語ったかと思うと、ムードメーカーの医局員を話題にして笑いを誘う。そして、最後はまわりの人への感謝の言葉。会場は、大木が放つ熱に包まれていた。

すべての村人に存在価値がある

大木は取材中、何度も「村社会」という言葉を口にし、アメリカ社会のベースをなす弱肉強食と徹底した合理化は日本人にはなじまないと言断する。

「終身雇用などにより村社会が成立していた高度成長期のサラリーマンは、忙しくとも、給料が安かったとしても、組織に対する帰属意識も仲間意識も強く『自分ががんばることで会社が良くなり、ひいては社会が良くなる』といった熱い精神を持ち合わせていたと思います」

村社会には無駄が多いように感じるが、たとえばでの悪い村人がいるから収穫能力の高い村人がやり甲斐を持って仕事ができるのだと大木は笑う。「すべての村人に存在価値があるので」

日2人ずつ交代で診療しています。僕も若い医師の教育とモチベーション維持のため、大学の仕事の合間を見つけては毎日、顔を出しています」

通常、下肢静脈瘤手術は2泊3日程度の入院が必要だが、同クリニックでは保険適用になったレーザーを用いて日帰り手術を実施。レーザー治療を行っている施設が少ない現状もあるが、銀座の地の利、マスコミの力も手伝い、外来予約は7カ月先まで埋まり、開設1年足らずで新患者数3000名、下肢静脈瘤手術1000件を突破したというから驚く。

「下肢静脈瘤は、脚の痛みやむくみを主訴とし、中高年の女性に患者が多い疾患です。通常の手術ですと、入院のため数日間家を空けなければならぬので、症状は我慢の範囲と自ら言い聞かせて、20年以上もスカートをはかずに辛抱している方も多く見受けられます」

そうした患者さんが日帰り手術の存在を知り、『やってみようかしら』と殺到した。治療を終えた患者さんは、笑顔で銀ブラをして帰ります（笑）

患者思い、医局員思いの大木。しかし、話をつづけるうちに、うれしそうに表情に陰りが見えた。想定内ではあったが、心ない噂に彼は一抹の淋しさを感じていた。

「クリニックの盛況を見て『大木は開業医まがいのことをして金儲けをしている』と一部がざわついていきます。僕はメディアに出てクリニックの広告塔をしながら手術を手がけてもいますが、ポランテア。指導医兼客寄せパンダにすぎません。一人ひとりに、誤解を解いてまわるわけにもいかず……。仕方ありませんね。僕の中では、医局員10名と看護師3名の生活を確保することができたのでよしとしています」



気兼ねのないコミュニケーションの中で、相手をおもんばかり、良い仕事をして互いを認め合う。そうした心のきずなが仕事にどれほどの励みになるか。損得勘定抜きの村社会は無敵大のパワーを生みます」

彼が帰国したころは、外科医局がゴルフコンペなど言語道断で、医局旅行は10年以上前から中止となっていたらしい。

「人と人のつながりを築くには、最初は忍耐も必要です。心の違和感を乗り越えてこそ、腹を割って話せる仲間同士になれる。しかし僕が考える『村社会』はゴールではなく、通過地点。『村社会』の復興は、構成員の総幸福度を上げるとともに一見遠まわりに見えますが組織を活性化し生産性を上げるための基盤づくりにつながると信じています」

前の外科学講座は3つの講座を無理矢理合体させ

銀座七丁目クリニック開設

大木が医局員たちに向ける愛情の大きさはスケールが違う。医局員急増の結果、アルバイト先不足の事態に直面し、十分な手当が出せるバイト先を自ら力をつくろうと、下肢静脈瘤のレーザー治療を行う「銀座七丁目クリニック」を開設したと聞いた。

「開設には先輩OBの協力を仰ぎ、医局員10人が毎

術

青戸事件を大きなきっかけに

2002年に慈恵医大附属青戸病院（当時）の医師3人が腹腔鏡下手術で前立腺がん患者を死亡させたとされている、いわゆる「青戸病院事件」はまだ記憶に新しい。大木がアメリカから呼び戻されたのも、事件後の慈恵医大の落ち込みが関与している。「青戸病院事件を機に慈恵医大は英知を集集し、国内でも先進的な医療安全に対する取り組みを始めました。今では、慈恵の医療者に腹腔鏡へのアレルギーはなく、安全に自信を持っているので、むしろ他施設より積極的に手がけている。慈恵医大では、腹腔鏡は学会認定を受けても、院内の実技テストを通らないと手術をさせてもらえないといった厳格なルールができたのです」

事件により自浄作用が働き、病院全体の安全基準を高めたと言うのだ。

「僕の知る限り、国内で腹腔鏡の技術認定を独自で行う医療機関は当院だけでしょう」

トキメキミニオンセンタータイプ

世界で指折りの腕を有する、大木のアメリカ在任時の肩書は外科教授で年収は約1億円。実力主義のアメリカで成功を手にした大木だが仕事に対するインセンティブが、すべて金に換算される社会を否定



PROFILE

おおき・たかお

- 1981年 暁星学園高等学校卒業
- 1987年 東京慈恵会医科大学卒業
- 1989年 東京慈恵会医科大学附属病院臨床研修
東京慈恵会医科大学第一外科入局
- 1995年 米国アルバートアインシュタイン医科大学血管外科研究員
- 1998年 米国アルバートアインシュタイン医科大学病院血管内治療科部長
- 2002年 米国アルバートアインシュタイン医科大学血管外科部長
- 2005年 米国アルバートアインシュタイン医科大学外科学教授（現在も兼任）
- 2006年 東京慈恵会医科大学血管外科教授
- 2007年 東京慈恵会医科大学外科学講座統括責任

『村社会』は、人が人を呼ぶ良循環に入り、間もなく成層圏を突破して無重力の水平飛行に入るでしょう。

する。

「今の僕らにはボーナスや時間外手当を含め、お金のインセンティブはありません。講座にあるインセンティブは、強いて言えば、より良い手術、研究開発、後進の育成などを通して、切磋琢磨することでしょうか。米国式の、食うか食われるかの競争とは違います。その結果が、海外留学や昇進人事に影響するケースもありますが、近視眼的、即物的インセンティブではありません。米国と違って教授の裁量で経済的なインセンティブを与えられない以上、お金以外のやり甲斐を感じられるものをバランス良く配分し、医局員が楽しく働ける環境をつくりたいと切に願っています」

外科学講座で年1回集まり、臨床賞、基礎賞、教育賞を選出して、全員の前で功績を称えます。理屈は、「無人島でもらうノーベル賞より、仲間に祝福さ



れる社長賞」笑。また、医局員が昇格したら祝賀会を、退任時には退任パーティを開く。さまざまな行事が、トキメキをもたらしてくれれます」

金銭では得られないきずなをつくる「手段」として、プライストレスのインセンティブを設ける。金銭的満足では心の満足を得られないと悟った大木だからこそ、お金では買えないプライストレスの真の価値を知るのだろう。

心構えを教えてくれるゴルフ

大木はかなりのアスリート。学生時代から柔道、サッカー、スキー、テニスに熱中し、現在は多忙をさわる中、大木杯を主催するほどゴルフに心酔する。教授に就任するとき、彼のハンディキャップは7だった。

「ゴルフは仲間同士が自尊心を賭けて闘うから面白いのです。人智の限りを尽くしてもコントロールできない神の領域が存在する一方、プライドや意地が絡み合う。これら2つが重なると、緊張感が生まれる。手術が成功する確率は、約50名が参加する大木杯でベストグロスがとれる数字よりずっと高いので、僕は手術で緊張することは減多にありませんが、プライドを賭けた大木杯では、毎回、緊張します」

「医局コンペでパットを打つときの緊張感は、たまらないと笑う。『真剣なゴルフファーほど、空気が震えるようなビリビリとした緊迫感を

経験する。僕は、外科手術を上達させる過程には、ゴルフの緊張感に耐えながらスコアを伸ばす道程と腹八分目精神、自己責任、ダメージコントロール、臨機応変能力、そして結果がすべてという点など、相通するものがあると考えています」

もっと言えば、スコアの良し悪しに関係なく、一生懸命ゴルフに取り組んでいると、ゴルフは手術で合併症を起こしてしまったときに似た敗北感を、誰にも迷惑をかけずに感じさせてくれ、人を謙虚にしてくれます。安心、安全が徹底された現代社会で、こうした機会はそうありません」

手術では汗をかかない

取材を受ける機会の多い大木は、よく相手に「汗をかかないのですか」と聞かれるそうだ。

「僕は、手術中に汗は全然かきません。運動しているわけではなく、立って手を動かしているだけだから、汗をかく理由がありません（笑）」

だがドラマなどでは、よく外科医が手術中に汗を拭いてもらう映像が写し出される。大木は、「汗をかくのは平常心を失い緊張しているから。悟りをひらけていない証しだ」と、一刀両断。

「一点のやましさもなければ、緊張はありません。平常心を保って手術を遂行するのに必須なのは、患者に必要な手術を行って、2つの条件が満たされていけば、緊張などしいはず。外科医は、もつと堂々と手術をしていいと思います」

手術中に医局員の背後にまわり背中に手を置く。汗をかいていたら「まだまだ修行が足りない」と大木はささやく。

削

贅肉のない体と生活

実を言うと、多忙な大木からまとまった時間をもたうのはすごく困難で、取材は大木に密着しながら行われた。彼はめまぐるしく移動する。カンファレンスルーム、教授室、七丁目クリニック、大学病院の手術室や処置室。

時間を惜しむように何も言わず、何も気にせず、取材陣の前でワイシャツを脱いで手術着に着替える大木の動作を見つめていて奇妙さを感じた。ネクタイをスッとゆるめ、輪っかのまま首から外したのである。

「全部ほどくと、また締め直すのに余分な時間がかかる。ネクタイは全部こうしていますよ。家でもこのまま、ゆるめた状態で吊るしています。」

ワイシャツのボタンも飛び飛びに留めます。全部留めると脱ぐときに面倒でしょう。ボタンは、白衣を着れば見えません。全部留めなくても困りませんから(笑)。

大木の生活には、まったく贅肉がない。食事は1日1食。院内を移動する際も常に資料に目を通してある。手ぶらで、ポーツとしている暇は一瞬たりともない。

身体にも贅肉はなく、1日10時間以上の手術を支える筋肉が備わっていた。

心の贅肉も削る

贅肉がないのは、心も同様。多くの人間が大木に対してダイナミズムあるいは、一種の強引さを感じるかもしれない。

しかし、素顔の大木はシャイでせん細な男だ。

己にかけられた、大学、医局員、そして患者からの期待。応えるには心の贅肉も削らねばならない。その行為はきわめて苦しいだろうが、大木は自分が先頭を切つてしなければならぬ。

頭の使命感を持って。重い使命感に潰されず表面では物事を言い切り、内面では物事を言い切ることに躊躇しているのではなからうか。大木隆生を観察すればするほど想像以上のストイックさが感じられた。いずれにしろ、「いけいけ、どんだん」の大木でないことは確信できた。

死に金を生き金に代えて

大木語録は多数あるが、「衣食足りたら、トキメキを求めよ」は決めの一節。突き詰めると、衣食が足りた以上に得たお金はトキメキを入手するための手段にすぎないとの意だ。

「もし、宝くじで10億円当たっても、すでに衣食足りている僕の明日からの生活で変わる点は何ひとつありません。お金は水に似ています。所要量なければ、生死にかかわらず流れていきます。」

熱

先輩の熱が後進に伝播

全国的に外科離れが進む中、大木率いる外科学講座はこの5年間で入局者は80名超と、全国的にも突出した存在。退局者も少ないので、自然と外科学講座は発展しつづける。

「医局員には、外科医はぼやかず、ぐちを言うなと話しています。先輩が『外科医なんて、やってられないよ』と言っていたら、誰が外科に入ろうと思うでしょうか。外科医こそ、チーム医療のリーダーになるべき。その外科医がぐちを言っていたら、病院



全体の士気も下がります」

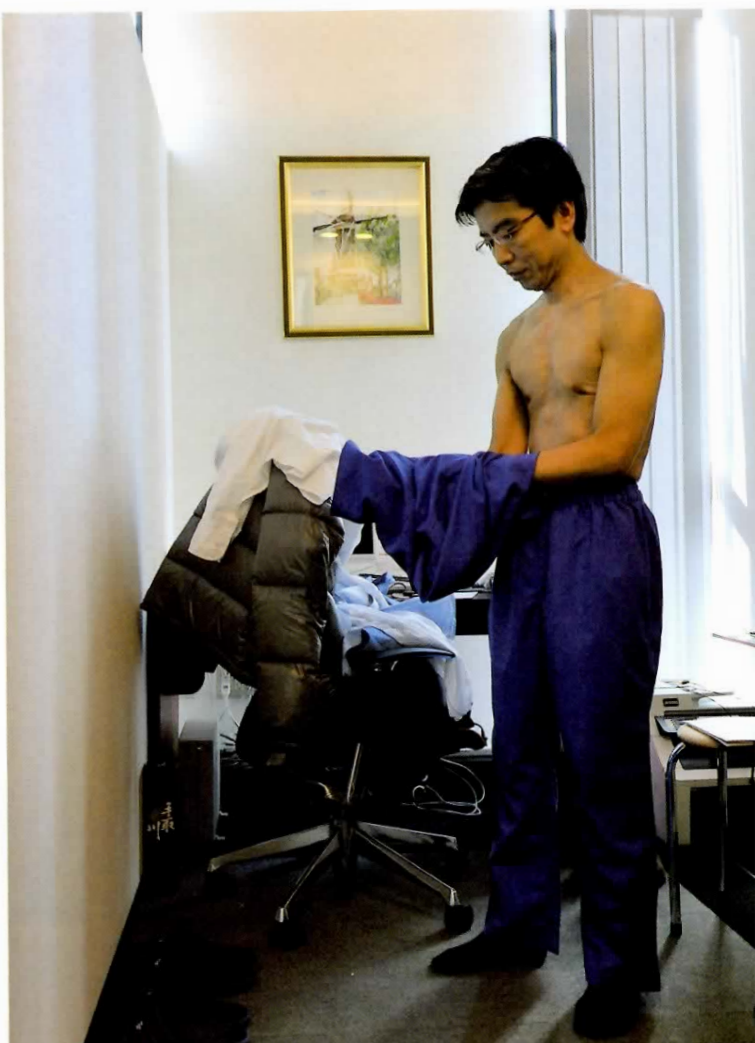
10年後の医療に視点を向け、すべき医療を行い、すべき教室づくりをしているだけと大木はあくまで謙遜する。

「先輩の背中が熱く輝いていれば、わざわざ『外科は面白いよ』と言わなくても、安っぽい勧誘などしなくても、若者は自然に集まります。医療に限らず今の日本の若者は捨てたものではありません。彼らに必要なものはロールモデルの存在なのかもしれないと感じます」

外科医のトキメキは尽きない

血管外科領域では近年、「ステントグラフト」という人工血管を用いる新技術が確立され、大動脈瘤手術も低侵襲で行われるようになった。新技術の登場で血管外科分野の進歩は頭打ちの感があるが――。

「現在もアメリカ企業とセントの新型モデルを共



かわりませんが、必要以上の水があったからといって、より幸福になれるでしょうか？」

彼の言葉を傲慢だと捉えてはならない。瞬時にアダム・スミスの労働価値説が思い浮かぶ。衣食が足りたら、それ以上の過大な金銭で、自らの求めるトキメキは買えないと大木は知っているのだ。彼は、不動産も車も所有していないが、「今の僕が、お金で買えるトキメキは、この世に存在しない」と言い切る。

大木は、己と家族とが衣食を足りて残った金銭を前述したようなチェアマナタ食会や多くの後輩との食事、大木杯など「村社会」の復興におしみなく充てる。自分には必要以上のお金を使わず、残りを紙くずにもしない。生きたお金の使い方を実践して見せている。

同開発していますし慈恵オリジナルの手術を開発しています。確かにステントグラフトで胸部と腹部大動脈瘤に対する低侵襲な手術が実現しましたが弓部大動脈瘤や胸部大動脈瘤など、いまだステントグラフトでは対処できない疾患はたくさんあります。僕が常に言うのは「完成された手術はひとつもない」。改善の余地はすべての手術に残っているのです。ゆえに、もっと良いものをつくる、開発するといった外科医のトキメキは尽きません」

「世界の太木」から「日本の太木」に

大木のまわりへの気遣いは人一倍。医局員、看護師、学生はもちろん、警備員や清掃スタッフの名前まで覚え、率先して声をかける。「僕が名前を覚える努力は数秒、でも、声をかけられたスタッフのモチベーションは上がるはずだ。政治家だった祖父に『社会的弱者にこそ、深く頭を下げなさい』と教わりました。」

慈恵医大の外科学講座の「村社会」は、人が人を呼ぶ良循環に入り、間もなく成層圏を突破して無重力の水平飛行に入るでしょう。成層圏までは僕の存在意義はあったでしょうが、突破したあとは誰かに引き継いでも良いと思っています」

しかし、そう簡単に「村社会」は大木を手放さない。大木の存在意義はまさに「いる」ことなのだ。さらに万が一、母校を離れたとしても、大木は日本から、今しばらく離れるつもりはないだろう。「世界の太木」が、わざわざ「日本の太木」になったのは母校の外科学講座の発展のみならず、日本社会に漂う閉塞感をなんとか打ち払いたいと決意しての結果なのだろうから。